有名キャラ官能小説ＣＧ集第４０８弾!!

絶頂せよ――。

ぱぁぱぁCG集

OVERLORD II

Win 95/98/ME | Win 2000 | 16MB Memory | 800×600 65536Color | マウス対応 | キーボード対応 | CG集

成年向

それが現なのかどうか、本人たちには理解らない。

「はっ、はっ、ぁっ、あんっ！！　素晴らしいわ、これが…これがセックスというものなのね…っあぁっ♪」

アルベドは恍惚として悦び、その腰を精力的に上下させていた。
既に射精の痕跡があちらこちらに見える。
豊かな乳房にはパイズリした痕跡として、口元にはフェラチオをした証として、
腕には手コキした履歴として、生々しい白濁液の痕が残る。

「くっ…アルベドに負けてはいられませんえ！　ほら、もっとしっかり力入れるでありんすっ！」

ライバル心剥き出しにするシャルティア。
アルベドとは違い、経験こそあるとはいえ同性相手のみ。
決して異性との経験に慣れているわけではなく、性行為の作法はまだまだぎこちなかった。

「うう…ん、本当にこれでいいのかな…、ボクお尻がもう痛いよぉお姉ちゃん」

「何いってんのマーレ！　このくらいで弱音吐いてちゃダメでしょ！

はぁ、はぁ…んっ、ほら…もっとがんばる！　私だってこんなの中に挿入れるの、初めてなんだからね！？」

姉として率先して深く激しくヤってみせるアウラに促され、マーレも頑張ってアナルを締める。
それぞれの穴に深く挿入っている緑のペニスは、彼女達にはいささか大きすぎるサイズだ。

「くっ…アウラ達もやりんすね…。うかうかしていられないでありんすっ」

シャルティアがさらに攻勢を強めれば

「んっ、んんっ…フフッ、確かに…あの二人には遅れをとるわけにはいかないものね。

こちらももっと激しくいくわよ…覚悟なさいな」

アルベドも、更に強烈にその腰を振るう。
だが己が行っている猛烈な搾精が一体何のためか、彼女は理解していない。

「はあっ、はっ、んっ、あはっ…いいわぁ、もう少し…もう少しで何かがキそうよ…はぁはぁ、もっと、もっとっ」

種族としての本能がだんだんと強まってくる気がする。
もう何がどうだったかなんて疑問はどうでもいいと、
その心は性欲一色に染まって、己が何者と交配しているのかも認識できぬままに――――

「ああぁっ、いいわそう！　はぁはぁ、きなさいっ、早く…今っ、よっ！！！」

ドグドクンッ！！！　ブシュルルルルッ！！　ブビュウウッ！！！！

「はぁぁぁぁぁんっ！！！　さ、最高だわ…ぁっあっ、な、なんという心地よさ…ハァ、ハァ…これがセックスなのね♪」

下等なゴブリンの種を受け入れる。
そして、何もかもが霞みとなって忘却の彼方へ――――
彼女達は、自らがゴブリンと交配していた事すら認識せぬままにいつも通りに行動する。
いつかその腹が膨らんでしまうその日まで、異常に気付く事すらなかった。

閉じる

ドッチュドッチュドッチュ！！

淫らな音が響き渡る。それなりに質量のあるものが十分に濡れたものに突っ込んで奏でる音…

「はぁ、はぁっ、んんっんっ！！　お願いですゴブリンさん…はやく、早く終わらせて…んっあ！！」

「はは、分かってやすよエンリの姐さん。けど、もうちょいとばかしお付き合いくだせぇよ」

ゴブリン軍団の召喚――――彼らを従えるには代価が必要であった。

しかしただの小さな村の一般人。しかも親も殺されていないエンリに、支払える金品などない。

だが、代価は何も物品に限定されていなかったのが、まだ幸いであると言えた。

ドビュルルウ！！　ドクッドクッドクッドクゥッ！！！

「んんううっっ！！！」

「ふはー、相変わらずいい締まりですぜ姐さん。今後ともよろしく願いやすぜ」

「はぁ、はぁ…はぁはぁ…こ、こちらこそ…はぁはぁ、よろしく、お願いします…」

すなわち、繁殖意欲を受け止める事――――下の世話であった。

「はーはー、んーーー…っ、ううううっん！！」

「はぁはぁ、だ…大丈夫、ネム？　無理はしないで、すぐ言ってね」

そんな姉の苦労を知ったネムは、その労を少しでも緩和しようと自ら股を開くに至る。

「だ、大丈夫！　ぜんぜん平気だもんっ…んしょっ、んっううっん！！」

大丈夫なはずはない。エンリの持つ乏しい知識で考えても、ゴブリン達のペニスは普通より遥かに大きい。

しかも射精量も――――

「くううう！　いきやすぜ、ネムさんよ！　腹に力ァ込めてねーと、破裂しちまいやすぜっ！？」

「！！　う、うんっ、いいよっっ！！」

ビュゴォオッ！！！　ドゴドボドボドゴドゴボボボッ！！　ドボンッドボブブッ！

子宮にぶち込まれているのに、口から吐き出しそうな表情を見せるネム。

大量のザーメンが猛烈な圧迫感となって下腹部を中心に彼女の内より広がっているのだ。

「はぁはぁ、ネム…無茶しないで…。ゴブリンさん、次をお願いしますっ」

こうしてカルネ村は、エンリの毎日の頑張りによってその治安と平和を維持していた。

閉じる

ドヴュルルルウッ！！　ドゴッドグッドチュウンッ！！！

「くはっ！！　…かはー、はー…はーぁ…相変わらず、なんて…量だ…はー、はー…」

悪魔の射精を受け、イビルアイは激しく息をつく。
猛烈な嫌悪から、胸を焼くような嘔吐感まで沸き起こり、なんとか我慢するも、
鎮静化の直後には、その口に考えられないような巨根がぶち込まれた。

「ふんぐぅ！！！？　んぐっ、うーーーっ！！！」

ガブリ。噛みつく。
だがそれは、もう何百回と行ってきた抵抗であり、なんら効果がない事もわかりきっている。
事実、男根を噛まれた悪魔は小首をかしげ、まるで蚊でも刺したかな？　と言わんばかりになんともない。
それでも…何か一矢報いなければ、気持ちが収まらなかった。

「おやおや、“こちらは”まだ随分と元気なようですね？」

「貴様！！　我々の仲間はどうした、ヤオタバルト！！」

憎悪の対象が姿を見せると、イビルアイは悪魔のチンポを振り切って憤怒をぶつけた。

「お元気ですよ。もっとも…一番大きな方は、先ほど息を引き取られたようですがね」

「！！　…くっ、…ガガーラン…。…？！　ティア！　ティアか！？」

無造作に投げられてきた女性は、他でもない仲間の一人。
一人の訃報に、一人は生存が確認できた。喜びと悲しみが同時に襲い掛かるが、そんな感傷にひたる間はない。

「あ、……あ、イビル、アイ…はぁ、はぁ…」

「？　…てい、ティア？　お前…一体どうし――――」

ズブゥウッ！！

「んくぁあぁっ、き、気持ちいひぃいぃっ…あひっ、あはぁあっ、んへぁあぁっ♪♪」

悪魔に犯されて、この上なく悦びだすティア。
かつて見たことのない態度と喘ぎ方に、イビルアイは愕然とした。

「貴様っ、ティアに何をした！？」

「いいえ？　貴方と大差ない事ですが…ただ彼女は堕ちるのが早かった、というだけの事ですよ」

ティアは悪魔の化け物じみたチンポと精力の前に屈していた。

「（もっとも、その隙をついて洗脳し、我々に従順なる奴隷と化したわけですが）」

だがそれは言わない。
粘るイビルアイの精神を追い詰めるため、ティアが悪魔達の陵辱だけで堕ちたと思わせる。
デミウルゴスはほくそ笑む。彼女らを追い詰めるこの過程を大変に楽しんでいた。

閉じる

「ああ、だ、ダメでありんす…またそのようなぶっといおチンポでわらわを…ああっん！」
シャルティアの身体が軽く浮いて、着地する先は見知らぬ男の股。
ズッポリとハマったペニスは、彼女の胎内深くにまで侵入する。
「はぁ、はぁ…んっ、なぁに…もう出そうなの？
いいわよ、いくらでもイってかまわないわ。もちろんどこに出そうと自由よ…」
ドクドクッドクッ！　ドクッドクウッ！！　ビュルルッドククッ！
ワーカーの男達は笑いが止まらなかった。
侵入した遺跡で捕らえた女を相手にヤりたい放題。
服をひん剥き、乳を乱暴に引っ張ってはその顔面にペニスを擦りつける。
もちろんマンコにぶち込んで、その精を思いっきり注ぐ事は当然。
「へへへ、山のような宝に加えて、とんでもない上玉女も手に入るとはな」
「おい、宝は山分けだけどよ、女はどーすんだぁ？　２匹しかいねぇんだぞ？？」
「孕ませたヤツのモンってのでどーよ？　ま、誰のガキかわかりゃしねぇか、ヒャハハハ！」
だが、少なくとも彼らが飽きるまで二人は輪姦わされる。
そして飽きるまで彼らはここにい続けるだろう。

――――ただし、彼らが飽きる時がやってくる事は、永遠にない。

ビュロッ！　ビュビュッ！
「あら、まただわ。一体どんな夢を見ているのかしらね」
「まったくでありんすなぁ…
あんな粗末なイチモツを健気に勃起させて夢精だなんて、よほど幸せな夢を見ているんでありんしょうよ」
現実は、まるで違った。
ワーカーたちは全て囚われ、まるで狂った者のような表情を浮かべて気を失ったまま拘束されている。
「下等な人間とはいえ……知ってる事すべてを吸い上げるのは時間がかかりそうね」
何やら妙なスライムめいたモノが彼らの全身と、その頭の一部にくっついている。
そう、ワーカーたちは拷問を受けている真っ最中。だが彼らにその自覚はまるでない。
欲望を根源に見る夢に溺れたまま、目覚める事は決してない。
しかして、現実で彼らの身が滅ぶその時、その都合良き夢は果たしていかに変わるのか？
それを考えるだけで、二人の加虐心が疼く。早くこの愚か者たちを、細切れにしてやりたい――と。

閉じる

ドビュルルウ！！　ドクッドクッドクッドクゥッ！！！

「～～～ッッッ！！」

エンリの身体が跳ねた。大量のゴブリン精子が、その腹の中を焼いたのだ。

「おー、また派手にいったっすねー。エンちゃん、すっかりゴブリンチンポの虜っすね♪」

「そ、そんな事…はぁはぁ、あ、ありませんっ、はぁはぁ…んんっ！」

だが否定する勢いは小さく、紅潮しっぱなしの頬の上で瞳の光はトロンと蕩けてしまっている。
中出し終えたゴブリンチンポがズルリと抜き取られても、終わったと安堵する事はない。
新たなゴブリンチンポがマンコを穿つと、唇の上下を幾本もの唾液の糸で結びながら大口を開く。

「ぁああんっ！　ご、ゴブリンさん…ハァハァッ、す、少し待って…ぁっあっ！！」

「すいやせん、姐さん。オレ達止まらないんでさぁっ！！！」

もはや行為そのものを拒絶はしない。だが身体がイキっぱなしで、頭がフラフラしてくるのだ。
先日結ばれた夫、ンフィーレアと経験はしている。
だからこそ夫のモノとは比べ物にならないゴブリンチンポに犯される事は、
その身でもって比較させられ、多大な衝撃となってエンリの心身を駆け巡る。
１本でもそれなのに、周り全てそんなチンポの持ち主ばかり……それも召喚されたゴブリン達全員だ。

「いやー、この程度のチンポでヘロヘロになるなんて、やっぱダメっすねー人間は。
……クス、そこがまた…弄り甲斐もあるのだけれど」

自らもゴブリンのチンポを楽しんでいるルプスレギナから一瞬、飄々としたものが消え去る。
虐げて愉悦する者の顔が覗くが、すぐに戻ってそのバストを大きく震わせた。

「ほらほら、手伝ってあげてるんすから。早くヤっていかないと、朝までに終わらないっすよー？」

「あっあんっ、そ…そんな事、言われて…も…んんっ、こ、こんなにたくさん…あっあっ！！」

突然の発情期。だが、それは自然発生したものを装ったルプスレギナの仕業である。
ゴブリンとエンリの食事に仕込んだ、悪魔すら理性のタガが飛ぶという媚薬の試験。
ゴブリンと人間の間に子供は出来るかという実験…それらが主な目的だ。
しかし、命令とは別に、ルプスレギナはエンリを堕とす気でいた。

「（フフフ、大切な奥さんがいつの間にかチンポ狂いに変えられていたと知った時、どんな顔を見せてくれるのやら）」

エンリが人外相手に悦んで腰を振るうビッチと化した姿も楽しみだが、
それ以上にその夫、ンフィーレアがそれを知った時の表情もすこぶる楽しみ。
ルプスレギナの個人的な愉悦のために今、一組の夫婦の愛は、
焚きつけられた獣欲によって粉々に砕かれつつあった。

閉じる

「ふー、ふー…うく…っ、はーはー…んあっ……く、ぅ、……」

ナーベラルは四苦八苦しながら腰を上下させる。
慎重、しかして相手を満足させられなくては意味がないゆえ、手探るように時折少し強めに振るう。
――――勝手がまったくわからない。これでいいのか悪いのか？　過剰？　不足？　弱い？　強い？

「クス、だめよぉナーベラル。単調なだけじゃなく、もっと腰を回したりしないと」

「わ、わかっている…くっ、こ、こう……かな……。どうでしょうか…はっ、はっ…んんっ、アイン――――モモンさま…」

ソリュシャンに言われて若干ムキになって腰を回すが、やはりぎこちない。
当然と言えば当然だろう。
ナザリックのＮＰＣ達は、サキュバスであるはずのアルベドでさえ経験がないし、そういった設定もなされていない。
上位者に対して主に戦闘面で奉仕するメイド、プレアデス達に至っては、それは更に顕著だ。
ソリュシャンにしても分った風な事を言ってはいるが、知識的なものを培った上での事で、
性格からくるこういった行為への積極性、その僅かな差しかない。

「うむ、もう少し円滑にできるように。悪くはないが、それでは相手に侮られる事になるであろう」

モモンは、アインズ本人ではない。アインズの命によりパンドラズアクターが成り代わっているためだ。
これはアインズ自身で相手をするのが気恥ずかしかった事と、
彼女らに今後、特別な命を与える事になるであろう後ろめたさから逃避したためだ。

「（んーぅアインズ様も、困難な命をお与えになる。この私めとて、こういった経験はまるでないのですが…）」

王国の調査と帝国との友誼交流で知った貴族社会。
アインズはそれに対応できるよう、３人は今後、来客に対して“接待”が出来るよう訓練を命じられた。

「はぁ、はぁ…うぅ、大変恥ずかしいですが…これも至高なる御方のお役に立つためです。
ナーベラル、ソリュシャン。気合いを入れて務め果たしますよ」

「と、当然です…くんっ、んっ…あっあうぅ…！」

「もちろんよぉ、ユリ姉様。私はむしろ、楽しみですわ…フフフ♪」

心身ともかなり頑張っているナーベラルとは違い、ソリュシャンは楽しみで仕方ないとばかりに舌なめずりをする。
射精物を吸収すると、一体どんな味なのか？
性的快楽に対する興味よりも、男精を食することへの好奇心がその表情にあらわれていた。

「よぉし、ではさっそくイクぞ。まずはナーベラルからだ、しかと受け止める感覚を身体で覚えるのだ！」

「！！　は、はいっ…かしこまり――――」

ビュドロロロッ！！　ビューッビュビューーッ！！！

だが心の準備が整う前に、腹中を射精が襲う。
ナーベラルは思わず口を結んで、表情をクシャクシャにしながらビクンとその身をふるわせた。

閉じる

ドキュッドキュッドグキュルルッ！！

「くはぁっ！！　…ぐ、う…んんっ、こ、こんなに中に……はぁ、はぁ…だ、出されるなんて…っ」

イビルアイは紅潮したまま、今にも倒れそうにフラフラと身体全体を揺らめかせた。

「おっと、まだ参ってしまうのは早い…お楽しみはまだまだこれからなのだからな」

骨の手が、彼女の傾きかけたお尻を掴む。

そのままマンコを開くが、ザーメンは流れ出しては来ない。

「ふむ、実験は上々、といったところか。後で胎内も調べる必要があるが———」

そこでアインズは思わず“そこはアインズ様に御頼み申する事として”と口にしてしまいかけるのを自制した。

命により、今は自分がアインズなのだからなりきならなくてはならないと、パンドラズアクターは己を戒めた。

「…さて、次はこちらだな」

「ああ、早く、早くその逞しいものを…はぁはぁ、はぁはぁっ」

自分の中に湧き上がる衝動に戸惑いながらも、ラナーは懇願して止まない。

「どうやら洗脳の方は上手くハマっているようだ。貴様もレジストなどせず、素直にハメられていれば楽であったものを」

「はぁ、はぁはぁ…だ、黙れ…っ。漆黒の…漆黒のモモンが、モモン様がまさか…お前のような…んうっ！！」

イビルアイの身体が跳ねる。完全に身体の動きを支配されていて、魔法の一つも撃ち出せない。

「んあぁあぁあ！　いい、素敵です…っ、あっあっ、もっと、もっとください、私めにもっとその素敵なモノをっ…ああ！！」

ラナーの悦びようはひとしおだ。まだまだ欲しいと、自分で胸を揉みはじめる。

全身を駆け巡る性衝動に完全に支配されていて、相手がクライムでなかろうともはや関係なくなっていた。

「はぁはぁ、…ぁっあっ、イ…イっちゃう、ま、また…んんっ、い、…イっちゃうよぉ！」

エンリが黒いナニかに絶頂へともっていかれ、

「ぐうぅ！！　はぁはぁ、ど、どうなっている…力が…はいらな…んんあああっ！！」

ラキュースに至っては、いまだ戦っているつもりだった。

もはや剣すら持っておらず、その胸を搾りあげられて二穴にもズッポリと黒いモノが深々と入っているというのに。

４人それぞれに掛けたアプローチは異なる。

だがいずれも行きつくところは同じ———偉大なる御方への絶対なる恭順と、各方面に手足となって活動する者。

「（このパンドラズアクター、偉大なるうぉん方のため、さらに頑張らせていただきまっす）」

これはアインズの知らない仕込み。よかれと思っての自発的な行動だ。

後に彼女達にこの記憶は残らない。だが奥底にアインズへの愛欲がこびりつく。

彼女達の関係者に怪しまれる事なく、いずれアインズへ心身とも奉仕する悦びに喘ぐ事になるよう、

この仕込みは密かにかつ定期的に行われていた。

閉じる

「あっあっ、あーーー！！　も、もう無理よ、そんなに入るわけっ、んんぅーー！！！！」
だがイミーナの胎を、大量の精液が容赦なく穿つ。
ただでさえ醜く膨らんだ出腹は、表面をボコボコと波打たせつつ、更にその膨らみを増した。
「（ま、だ……だい、じょうぶ…。まだ、まだ…たえ…られる……）」
アルシェはあまり喘がず、しかしギリギリのところでなんとか耐えていた。
だがその胎は、イミーナ同様に醜く膨らみ、
小さかった乳房がそれなりに膨らんで戻らぬようになってから既に久しい時間が流れている。
彼女達は、一度その命を残酷に散らされた。
だが、実験のために復活させられ、長きに渡って束縛されながらある役目を担わされ続けていた。
「！　…も、もう…いや、嫌なのにっ、ま、また…う、生れるううう！！！」
ボコボコと、イミーナの腹がうごめく。
それは先ほどの中出しザーメンによるものよりも遥かに大きな波を、その表面に起こしていた。
「はぁ、はぁ…はぁ、はぁ、…たえ、て…イミーナ……はぁはぁ、まだ…この、くらい…なら……」
一度は殺された身だ――――そう考える事で、アルシェは辛うじてその自我を保っていた。
この、見渡す限り発情したゴブリン達しかいない、絶望的な空間の中でも。
「ううう、そ…そうはいっても…っ、あっあっ、ううう！！　こ、こんな事…こんな、…うううっ」
強気な彼女の面影はない。
当初こそ、頑張って務めあげれば、死した恋人を復活させてくれるという約束を希望に、
このゴブリンの群れ相手に輪姦わされる事を受け入れ、そしてその胎を何度痛めようとも耐えてきた。
しかし回数を重ね、カエルのように膨らんだ胎が戻らなくなり、
乳首やマンコのピンクがすっかり黒く染まった頃から、絶望が彼女の精神を蝕みはじめた。

ドグッドグッドクッゥッ！！！！　ビュドヴュルルルルルッ！！！

「んくうぅ！！　…はーはー、ふー、ふー…うう、こっちも…また、はぁはぁ、動いて…る…生まれる…」
アルシェが、この世界の人間の女を母体としたゴブリン繁殖というこの実験にも耐えられるのは、
あくまでも生きてさえいれば、というところに彼女の希望があるからだ。
それは、たとえ如何に醜く成り果てようとも良い。妹たちの事を想えば、生きてさえいられれば良い。
だが、イミーナは違う。彼女の希望は、亡き恋人の復活――――すなわち異性に対する恋慕の情である。
「、あっあ、…んぐうぅぅ！　や、いやよ、もう…ま、またう、生れるのっ、これ以上…あっぁっ、あああぁあ！！」
穢されて醜く変わり果ててしまい、失われた女としての美。
すっかりゴブリンチンポに馴染んでしまったマンコに尊厳なき苗床の日々……
心身ともに彼女は絶望へと染まってゆく。
ブチュブチュブチュ……ブリュルルッ！！　グボォオッ…ブゴバァッ！
「あぁ、あああああああああーーーー！！！！！」
もはやすっかり慣れた出産。苦痛も慣れた、恐れすら感じない。
まるで機械のようにゴブリンの種を貰っては産むを繰り返すこんな自分を、
生き返ったとてどうして彼に見せられようか？
そして、大きく口をあけたままのマンコに、またゴブリンチンポが種付けにやってくる。
ぶち込まれ、子宮までしっかりとハメこまれ、受精し着床するまでゴブリン遺伝子を注がれ続ける。
それが、二人の運命であり、やがて彼女達が産んだゴブリンすらその輪姦の輪に加わる。
終わりはない。
生きていたとて地獄は永久に続く。そして、死なされる事もなく、二人は……永遠に苗床であり続けた。

閉じる

「んおぉぉお！！！　んぼぉぉおおおおっつっ！！！」

巨大な触手に口から胃、腸に至るまで内臓を蹂躙されているにも関わらず、
クレマンティーヌは吼えていた。

「あらあら、これほどの目にあってもまだ元気があるなんて。
アナタ……本当にいい“食糧庫”ですわね」

至極嬉しそうに笑みながら、
クレマンティーヌのマンコに自身の一部をスライム状に戻して突っ込んでいるソルシャン。
同じくマンコには、赤黒くて表面に突起だらけのいかにも拷問目的といった極太の触手が、
ゴリゴリと膣壁をえぐりながら出入りしていた。

「ちわーす、なんとかティーヌさんはまだ元気ッスかー…って、
なんスかコレ？？　カオスっすねー、どうすればこんな状況になるんスかね？」

「えっとねー、オマンコの中はー、ソルシャンの“食糧”を作るのに使ってー
お尻の中の方でー、アタシの好物を繁殖させてるところー」

エントマの説明を聞いて、ルプスレギナはうげっと顔をひきつらせた。

「それは災難っすねー。
まーアインズ様に剣を向けた報いがこの程度で済んでるだけ、まだマシなほうッスかね？」

クレマンティーヌは、その身を化け物に利用され尽くしていた。
マンコに突っ込んでる巨大触手は、一見するとピストン運動を続けているように見える。
しかしその実態は、胎内で彼女の卵巣をガッチリと掴んだまま排卵を促しつつ、
排出された卵子へ即座に人間の男達から精巣ごと取った精子をぶち込んで受精させ、
そのまま胎壁に押し付けて絶対強制妊娠させる永久機関である。
そしてある程度成長した胎児は、ソルシャンが食すというわけだ。

「んごぉぉおぉぉ！！　んごっ、おごぉぉおおおんんんん！！」

そして見事に巨大に膨らんだ腹の中――――
正確には肥大化した腸の中は、これまた化け物じみた蟲でいっぱいである。
様々な蟲の幼虫はエントマによって植え付けられ、彼女の道具として食糧として活用される。
しかもいやらしい事に、蟲の中にはしっかりと、
成長すると人間の腸で消化され、栄養になるものまで植え付けられており、
クレマンティーヌは飢える事がない。排泄物も全て蟲のエサだ。

「…そんな状態でもそんな目が出来るんスから、まだしばらくは壊れなさそうッスね。
アインズ様には、二人がいいモノを貰えて喜んでたって伝えとくっスよー」

エグい現場をそそくさと、逃げるように退散したルプスレギナの背後から、
クレマンティーヌのうめき声がひと際大きくこだました。

閉じる

「調子は…どうやら順調のようですね」
『コレハデミウルゴス様。ハイ、トドコオリナク…』
様々な獣の如き悪魔達が、このようなお姿でお迎えし、申し訳ないとばかりに頭をたれる。
だがデミウルゴスは構いませんと軽く微笑みながら、
ジェスチャーでそのまま続けるように促した。
「はー、はー…ううう、ぶ、ぶっといのぉ…もっと、もっとぉおぉ……この私めにくださいませ…はぁはぁ」
レイナースは虚ろな眼でうわ言のように懇願する。
悪魔たちのペニスは、長さも太さも人間の男の数倍は軽い巨物。
それらを前にしてもはや恐れはない。大股は開かれたまま、僅かも閉じようとはしていなかった。
「ふむ、ですが…念には念を入れなくてなりません。
いかに忠誠を誓うとはいえ外部の者であり、所詮は人間ですからねぇ」
『ハッ、ココロエテオリマス。カンゼンナルニクニンギョウトナルヨウ、シドウイタシマスレバ、ゴアンシンヲ』
呪いを受けた片目を除けば、レイナースは美女である。
その呪いも、絶対的かつ永遠の忠誠を代償に、取ってもらえる予定だ。
だがそれだけで外部の人間を迎え入れるほど、ナザリックは甘くはない。
レイナースは精豪の悪魔達によって、一切の自我も思考能力も消え去るまで、犯し続けられる。

「んおぉあぁあっ、も、もっろぉおぉ、もっろくらはいませぇえっ♪♪」
今はまだ、快楽の中に意志がある。
既に数か月はこうして悪魔達の慰み者になっているにも関わらず、完全に堕ちきっていない。
デミウルゴスはそれはそれで面白いと思いつつも、
その意志を完全に消し去るまで、決してレイナースを仲間はもちろん、手駒とすら認識しないつもりだ。
「ま、壊れたところで所詮は低レベルな人間です。遠慮はいりませんので、徹底的に嬲るように、よろしいですね？」
『ハッ！　カシコマリマシタ』
やがてレイナースは恐怖公にすら抱かれ、その眷属の繁殖にさえ発情するようになる。
ナザリック所属の者達による種付けの実験に利用され、
生きた孕み袋として快楽に満ちた人生は、それでもなお幸福なのか否か……彼女自身にも分からないだろう。

閉じる